

論文

大学生における新型コロナウイルス感染症による生活の変化とストレス (1)

～相互協調的自己観と関係流動性との関連～

伊坂 裕子^{※1}・有木 永子^{※1}Lifestyle Changes and Stress Due to COVID-19 Among University Students in Japan
: Relations to interdependent-self construal, relational mobility, and moralityHiroko ISAKA^{※1} and Nagako ARIKI^{※1}

ABSTRACT

The new corona infection (COVID-19) has brought about significant changes in the lives of college students. The purpose of this study is to investigate the life changes and stress responses experienced by college students and to examine the relationship between these changes and cultural self-view, relational mobility, and moral judgment. The results showed that college students perceive the decrease in contact with others as a distressing experience, and although there was no difference between males and females in these stressors, stress responses were higher in females than in males. In addition, four types of moral judgments were identified, and the relationship between these types and stress responses was also shown. In the present study, the relationship between interdependent self-views and relational mobility and stress responses was also suggested and discussed in the cultural context. However, since the results may differ depending on the phase of the infection, the importance of further investigation is suggested.

1. 問題

新型コロナウイルス (COVID-19) による感染症は、2020年3月にはWHO (世界保健機構) によりパンデミックと認定され、その後、2021年11月の現在に至るまで世界的に猛威をふるっている。我が国でも2020年4月7日に緊急事態宣言が発令されてから、何回か流行の山を繰り返している。

流行の動向が予測不能な状態で、感染拡大を防ぐための公衆衛生上の管理が必要とされる一方、そのことに起因する社会経済活動をめぐる問題も起きた。また、感染者への差別や誹謗中傷等の問題も発生した。このような状態で、人々は心理的、社会的、経済的影響を長期的に受けることになる。

厚生労働省 (2020) は、2020年9月11～14日に全

国の15歳以上を対象にインターネットを通じてメンタルヘルスの調査を実施した。10,981件の回答のうち、何らかの不安等 (「神経過敏に感じた」「そわそわ、落ち着かなく感じた」「気分が落ち込んで、何が起こっても気が晴れないように感じた」) を感じた人は半数程度であったことが報告されている。不安を感じる内容としては、「自分や家族の感染 (60.8～67.6%)」「自粛等による生活の変化 (21.3～32.3%)」が上位を占めている。

同時期の2020年8月4日から9月30日にインターネット調査を実施した筑波大学の研究チームは、10代～70代までの7,520名から回答を得た (Midorikawa, et al., 2021)。この調査では、8割の人が新型コロナウイルスにストレスを感じ、約半

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

数の人が恐怖や不快感を持つことが報告された。約6割の人が軽度のうつや気分障害などが疑われることも示されている。この割合は、他の災害等と比べても、同程度かそれ以上であるという。

大学生を対象とした調査は、文部科学省(2021)や全国大学生生活協同組合(2021)が実施している。1,744名の大学生が回答した文部科学省(2021)の調査からは半分を超える人がオンライン授業に満足しており、不満足の上回る結果となった一方で、4割近くが授業等に関する悩みを抱えていることが示されている。また、将来のキャリア(73.3%)や、経済的な状況(40.7%)に関する悩みを抱える大学生も多く、1年生では学内の友人関係についての悩み(46.3%)も多かった。全国大学生生活協同組合(2021)のオンライン調査でも、大学生活を充実していると回答した割合が、コロナ禍前の88.8%から2020年秋は74.2%、2021年夏は55.3%と減少していることが示されている。

このように新型コロナウイルス感染症がストレスになってきていることは、多くの調査で示されてきた。報告が増えるにつれ、コロナ禍の影響が思いのほか複雑であることも指摘されるようになった(橋本, 2021)。たとえば、アメリカの一般成人を対象とした研究では、ステイホームと孤独感の関連が見出されなかった研究もある(Luchetti, et, al., 2020)一方で、ステイホーム令と健康不安、経済的心配、孤独感と関連があるとした研究もある(Tull, et. al., 2020)。この研究では、ソーシャルサポートによって孤独感が低まることも示されているが、日本人大学生を対象とした橋本(2021)の研究では、サポートやコーピングがストレスを緩和する効果がほとんどない一方で、ソーシャルサポートを得るための援助要請規範がストレスと関連することが示唆されている。安易な援助要請を否定する援助規範は、ストレスが少ない時には抑うつを低くするが、ストレスが多い時には抑うつに結びつきやすい。

このように複雑な様相を示す新型コロナウイルス感染症の影響を理解するためには、さまざまな文脈による多面的なデータの蓄積と検証が必要である(橋本, 2021)。本研究では、新型コロナウイルス感染症の流行による大学生の生活の変化、ストレス、さらに、

それらと日本人の文化的背景、特に相互協調的自己観や相互独立的自己観、関係流動性との関連、また、行動の道徳的判断との関連について検討することを目的とする。

現在、最も広く使用されている文化をとらえる基本的な次元は、集団主義－個人主義(Triandis, 1995 神山・藤原訳 2002)であるが、歴史上、病原体の感染にさらされた地域ほど集団主義傾向が強いことが示唆されている(Fincher, Thornhill, Murray, & Schaller, 2008)。集団主義の社会では、逸脱者に対して厳しく罰したり、集団内の関係や結びつきに高い価値を置いたりするため、それが感染症の脅威にさらされた個人にとってバッファーとして機能していた可能性があると考えられている(石井, 2014)。その集団主義と関連するのが相互協調的自己観(Markus & Kitayama, 1991)である。相互協調的自己観は東洋など集団主義的文化にみられるもので、自我の境界が比較的曖昧で、他者との関係やその場の状況の影響を受けて自我が発揮される。それに対して、欧米など個人主義の文化においては、個人の自我が他者や状況と明確に区別される相互独立的自己観を持ち、個人の行動は内的原因によって決定される。集団主義的とされる日本社会の中で相互協調的自己観が高いことは、新たな感染症の広がりに対する不安を解消するバッファーとして機能するのであろうか、あるいは、新たな生活スタイル、価値観が導入される中で、個人の内的な価値判断より集団の価値判断を優先する相互協調的自己観はストレスを高めることになるのであろうか。

また、関係流動性は社会環境に存在する社会関係の選択の自由度とされる。アメリカ社会は関係流動性が高く、既存の関係に固執するより新しい良い関係を求める傾向が強いが、日本社会は関係流動性が低く、既存の関係を維持しようとすることが報告されている(Schug, Yuki, & Maddux, 2010)。感染症は人との接触によって広がるため、39カ国の新型コロナウイルス感染症の最初の30日間の広がりを調べた研究では、関係流動性が高い地域ほど新型コロナウイルス感染症の広がりが早いことが示されている(Salvador, Berg, Yu, San Martin, & Kitayama, 2020)。関係流動性の低いとされる日本社会の中で

関係流動性を高く認識する個人は、感染症に罹患するリスクを高く認識し、不安が高まるのであろうか。また、コロナ禍では自粛警察やマスク警察など個人の道徳観に基づいて他者の行動を判断する傾向が高まったが、個人の道徳判断とストレスの間には関連があるのであろうか。

2. 方法

2.1. 調査対象者

大学生・短大生 361名。そのうち、出身国が日本以外の留学生19名を除き、342名を分析の対象とした。コロナ禍の生活の変化について、留学生は日本人とは異なると考えたこと、また、自由記述の言語表現を分析の対象とする(報告2)ことから、留学生は分析の対象から除外した。

2.2. 調査期間

Time 1 2021年4月6～15日 118名(男性65名、女性53名)平均年齢20.16歳($SD=1.04$)

Time 2 2021年6月28日～7月18日 224名(男性103名、女性120名、無回答1名)平均年齢19.00歳($SD=1.72$)

Time 1とTime 2は、調査対象者が異なる。Time 1とTime 2の調査対象者の年齢に有意差があり($t(340)=6.72, p<.001$)、Time 1の調査対象者がTime 2より年齢が高い。Time 1は78.8%が3～4年生であったのに対し、Time 2は69.6%が1年生であった。全体では、1年生が48.5%を占める。

2.3. 手続き

オンデマンド授業の中で調査の目的を示し、調査を案内した。回答は任意であること、調査に協力しなくても不利にならないこと等を説明した上で、調査に同意する人が自ら調査フォームに進む形とした。

2.4. 調査内容

1)生活の変化…学生5名と著者1名の討論によって挙げられた新型コロナウイルス感染症によって生じた生活の変化と尾関(1993)のストレスサー尺度を参考に作成した23項目(家にいる時間が増えた等)について、尾関(1993)と同様、「体験なし…0」「体

験したが何ともなかった…1」～「非常に辛かった…4」で回答を求めた。

2)現在のストレス反応…松浦・勝岡・脇(2012)の抑うつ感、易怒感、身体不調感、疲労感の4尺度からなる12項目(希望が持てない等)について、「まったくあてはまらない…1」～「よくあてはまる…4」までで回答を求めた。各尺度に含まれる各3項目の合計点を尺度得点とした。

3)行動についての道徳意識…新型コロナウイルス感染症が広がる中で社会的に話題となり、道徳的に問題と考えられている行動について20項目を作成し(外出を自粛しないこと等)、各項目について、「道徳的にまったく問題ない…1」～「とても不道徳…6」で回答を求めた。

4)関係流動性…Yuki et al.(2007)が作成した関係流動性尺度(日本語版)12項目について、「まったくそう思わない…1」～「とてもそう思う…6」の6段階で回答を求めた。12項目の平均値を尺度得点とした。

5)相互独立的-相互協調的自己観…高田・大本・清家(1996)によって作成された相互独立的-相互協調的自己観尺度(改訂版)20項目について、「まったくあてはまらない…1」～「ぴったりあてはまる…7」の7段階で回答を求めた。各10項目の平均を用いて尺度を構成した。

6)自由記述

新型コロナウイルス感染症について感じていることの自由記述を求めた。

自由記述の分析は報告(2)で行い、本報告では、1)～5)の尺度の結果について報告する。

2.5. 倫理的配慮

GoogleFormの冒頭において、調査は匿名で実施され、回答は研究以外の目的で使用しないこと、調査は強制されないこと、回答しないこと、回答途中で辞めることによる不利益がないこと等を説明し、アンケートの記入をもって調査の同意とみなすことを案内した。

3. 結果

Time 1(4月)とTime 2(6～7月)の2時期の各尺度得点の間には、相互独立的自己観を除いて有

意差が見られず、両サンプル間に大きな違いがないと判断し、両時期をまとめて分析を行った。

3.1. ストレッサーとしての生活の変化

23項目それぞれで体験した人のうち「何ともなかった」と答えた割合が少ない(すなわち、「やや辛かった」～「非常に辛かった」までの割合の合計が多い)順に並べたのが図1である。

「何ともなかった」と答えた人が20%未満の項目は、「他者と交流する機会が減った(16.9%)」「出かける頻度が減少した(17.6%)」であった。この2項目は体験した人も多く、また、「非常に辛かった」と答えた割合も30%を超えていることから、コロナ禍において、大学生にとって特に多くの人がストレッサーとして認識している変化であると思われる。辛いと感じた人が多い上位項目には、人との接触の機会が減少したことに関連するもの

が多く含まれる。しかし、これらの項目について、多くの人が辛いと感じている一方、16.9～22.3%の人は「何ともなかった」と回答していた。

授業のオンライン化については、約3割が「何ともなかった」と回答し、約7割が辛さを抱えていた。「非常に辛かった」と回答した人も約3割で、オンライン授業によって大きな負担を感じた人とそうでもない人に分かれた。

一方、この時点で新型コロナウイルス感染症の検査で陽性になった経験を持つ人が18名、濃厚接触者になった人が25名、濃厚接触者ではないが身近にコロナ陽性者がいた人が85名いた。これらの体験者のうち、「新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者になった」25名のうち、4分の1は、「非常に辛かった」と回答している。しかし、自分自身が検査で陽性となった18名は、67%が「何ともなかった」と回答しており、好対照をなしている。

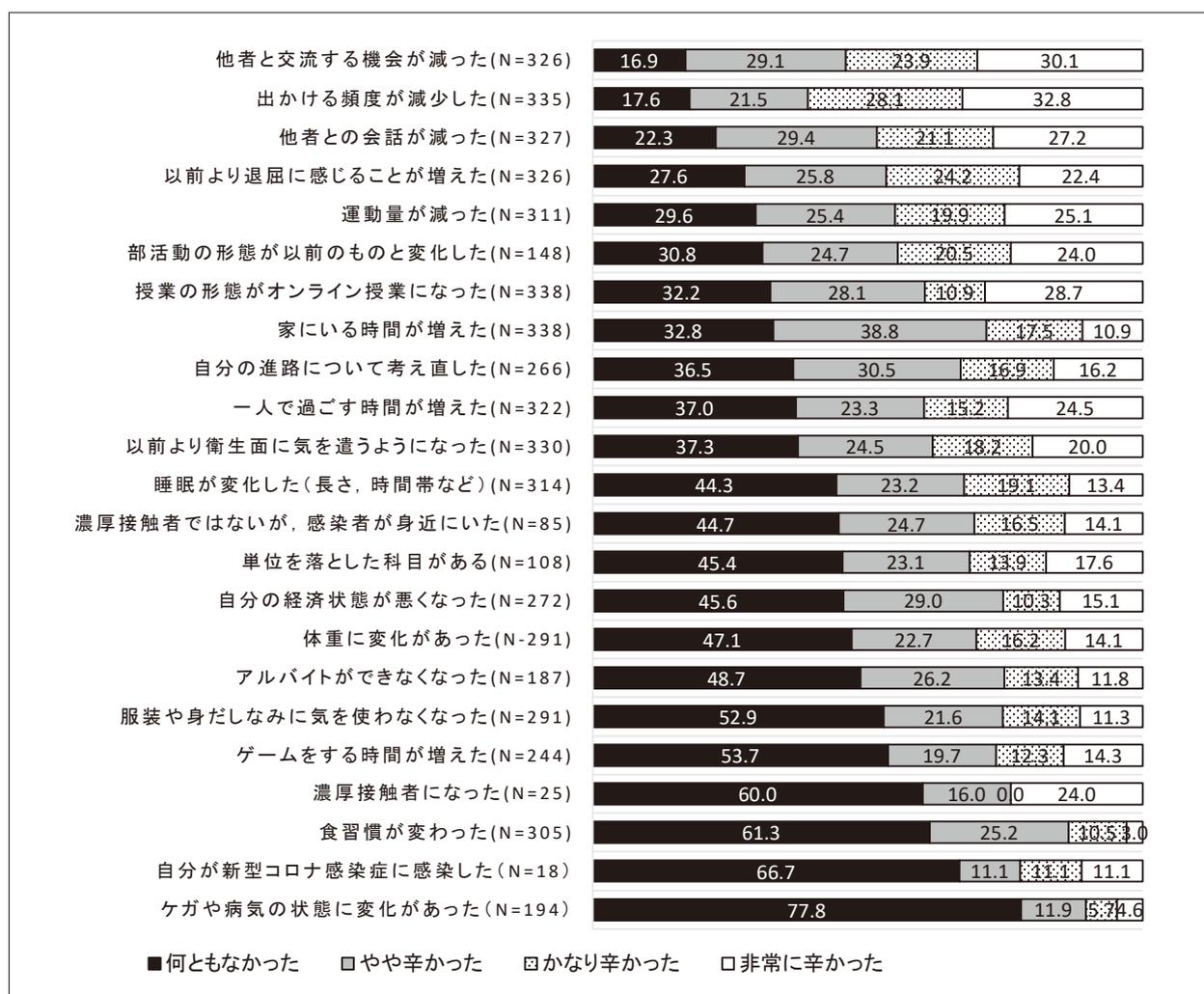


図1 生活の変化についての負担感

3.2. ストレッサーとしての生活の変化の因子

生活の変化23項目のうち、体験したと回答した者が200名以上の16項目について、辛さの程度を得点化し、探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を実施した。固有値の減衰傾向と解釈可能性を考慮して抽出した4因子を用いて尺度を構成した。

第1因子は、食習慣の変化などの項目の因子負荷量が高く、「生活習慣の変化」と名づけた。第2因子は、家にいる時間や一人で過ごす時間の増加などの項目で「一人時間の増加」、第3因子は、他者と交流する機会や他者との会話の減少などで「接触機会の減少」、第4因子は、自分の経済状態の悪化と進路の再考で「進路・経済的影響」と命名した。

各因子のクロンバックの α は、第1因子から順に.81, .83, .83, .40と第4因子を除いて十分に高い内的整合性が得られた。第4因子の α は低く、尺度として使用することには疑問が生じるため、本研究では第4因子を除いて、「生活習慣の変化」「一人時間の増加」「接触機会の減少」の3尺度を用いた。

3.3. 行動についての道德意識

20項目について「道徳的に問題である」程度(1～6点)の平均値が高い順にまとめたのが表1である。平均値の得点が高いほど、不道徳と考える程度が高いことを表す。

全ての項目で平均値は3を超えており、20項目すべてが道徳的にある程度問題であると考えられていた。平均値で5点を超過しているのが、「c8新型コロナウイルス感染症に感染した人を非難すること($M=5.28, SD=1.07$)」「c11新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者であっても、外出を控えないこと($M=5.27, SD=1.05$)」「c14医療関係者などが苦勞しているのに、感染予防に協力しないこと($M=5.15, SD=1.02$)」「c2新型コロナウイルス感染症が広がる中で、マスクをせず人と会話すること($M=5.06, SD=1.10$)」の4項目であった。一方、平均3.5未満の不道徳と考える程度が低い項目は、「c10重症化リスクの高い人のために、重症化リスクの低い人が行動の自由を制限されること($M=3.27, SD=1.29$)」「c9医療がひっ迫する中で、人工呼吸器など医療資源を若者に優先的に使用すること($M=3.28, SD=1.27$)」であった。

本研究に参加した大学生は、行動の自由が制限

表1 各行動の道徳的判断(道徳的にまったく問題ない…1～非常に不道徳…6)

	mean	SD
c8 新型コロナウイルス感染症に感染した人を非難すること	5.28	1.07
c11 新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者であっても、外出を控えないこと	5.27	1.05
c14 医療関係者などが苦勞しているのに、感染予防に協力しないこと	5.15	1.02
c2 新型コロナウイルス感染症が広がる中で、マスクをせず人と会話すること	5.06	1.10
c5 新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために策定された政策に従わないこと	4.77	1.09
c20 新型コロナウイルス感染症のワクチンを一部の豊かな国で買い占めること	4.73	1.19
c19 新型コロナウイルス感染症の影響で経済的な格差が広がること	4.68	1.15
c16 新型コロナウイルス感染症が広がる中で、マスクを適切に着用しない(鼻をだすなど)こと	4.67	1.17
c18 重症化のリスクの低い人が感染予防に関心がないこと	4.53	1.10
c17 家庭の経済状況によりオンライン授業などの教育の機会が得られないこと	4.51	1.31
c6 感染予防に協力しない人を誹謗中傷すること	4.48	1.27
c4 新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者であることを隠して外出する人を非難すること	4.35	1.43
c1 新型コロナウイルス感染症が広がる中で、外出を自粛しないこと	4.13	1.24
c7 新型コロナウイルス感染症が広がる中で、マスクを適切に着用しない(鼻を出すなど)人を責めること	4.10	1.27
c12 新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために策定された政策に従わない人を責めること	3.98	1.19
c13 新型コロナウイルス感染症が広がる中で、外出をがまんしない人を非難すること	3.84	1.22
c15 新型コロナウイルス感染症が広がる中でも、マスクを着用しない人を非難すること	3.69	1.29
c3 新型コロナウイルス感染症から社会を守るために、個人の自由が制限されること	3.62	1.35
c9 医療がひっ迫する中で、人工呼吸器など医療資源を若者に優先的に使用すること	3.28	1.27
c10 重症化リスクの高い人のために、重症化リスクの低い人が行動の自由を制限されること	3.27	1.29

されることをそれほど不道德と考えておらず、自由が制限されても感染症予防に協力しないことは不道德であると考えていた。また、新型コロナ感染症に感染した人を非難することは不道德と考えており、感染者への差別につながる意識が低いこともうかがわれた。

3.4. 道德意識の因子構造

道徳的判断を問う20項目について探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を実施し、固有値の減衰傾向と解釈可能性を考慮して抽出した4因子を用いて尺度を構成した。その過程で、どの因子にも.35以上の負荷量を持たない1項目が削除された。

第1因子は「c15新型コロナ感染症が広がる中でも、マスクを着用しない人を非難すること」「c13新型コロナ感染症が広がる中で、外出をがまんしない人を非難すること」などで「非難中傷行動」と名づけた。第2因子は「c5新型コロナ感染症の拡大防止のために策定された政策に従わないこと」「c2新型コロナ感染症が広がる中で、マスクをせず人と会話すること」など「感染拡大行動」と命名した。第3因子は「c19新型コロナ感染症の影響で経済的な格差が広がること」「c20新型コロナ感染症のワクチンを一部の豊かな国で買い占めること」など「社会的不平等」と命名した。第4因子は「c10重症化リスクの高い人のために、重症化

リスクの低い人が行動の自由を制限されること」「c3新型コロナ感染症から社会を守るために、個人の自由が制限されること」の2項目で、「自由制限」とした。

各因子のクロンバックの α は、第一因子から順に.84, .81, .75, .60と十分に高い内的整合性が得られた。

3.5. 男女の反応の差

生活の変化の3因子について、表2に男女別に平均値を示した。 t 検定の結果、有意差があるものはなかった($t(326.7\sim 339)=-1.55\sim 0.04)=-1.56\sim 0.04, p>n.s.$)。生活の変化がストレスとなる程度には男女差がなかったといえる。

一方、ストレス反応については、男女の反応に有意差があることが示された(表3)。抑うつ感、易怒感、身体不調感、疲労感の4尺度とストレス反応の合計点のすべての尺度で女性の得点が男性より有意に高く、女性のストレス反応が男性に比べて強いことが示された。中でも身体不調感は、女性の平均が8.35 ($SD=2.70$)とコロナ禍の女子学生が身体的不調を感じていることがうかがえる。

他の尺度については、行動の道徳判断において、感染拡大行動 ($t(314.8)=-4.96, p<.001$)と社会的不平等 ($t(334.3)=-5.62, p<.001$)については、女性が男性より不道德と考える程度が高く、道徳判断全体 ($t(331.4)=-3.64, p<.001$)も、男性に比べて女性

表2 生活の変化ストレスに関する男女別平均とSD

	男性 (n=168)		女性 (n=173)			
	mean	SD	mean	SD		
生活習慣の変化	1.93	0.80	2.03	0.74	$t(337)=-1.20$	$p=n.s.$
一人時間の増加	2.22	0.94	2.18	0.83	$t(339)=0.04$	$p=n.s.$
接触機会の減少	2.56	1.01	2.72	0.88	$t(326.7)=-1.55$	$p=n.s.$

表3 ストレス反応の男女別平均とSD

	男性 (n=168)		女性 (n=173)		$t(340)$	
	mean	SD	mean	SD		
抑うつ感	6.20	2.73	7.12	2.89	-3.00	$p<.01$
易怒感	5.07	2.33	5.64	2.51	-2.15	$p<.05$
疲労感	6.53	2.64	7.91	2.85	-4.64	$p<.001$
身体不調感	7.01	2.66	8.35	2.70	-4.62	$p<.001$
ストレス合計	24.82	8.23	29.02	8.98	-4.50	$p<.001$

の方が不道徳と考える程度が高いことが示された(表4)。特に感染拡大行動については、女性は平均5.05 ($SD=0.67$)と5点を超えており、感染拡大行動に対して不道徳と考える程度が高く、道徳的に厳しい姿勢を持つことが示された。

関係流動性($\alpha=.76$)については、女性は男性に比べて有意に低く($t(339)=2.54, p<.05$)、女性は関係を固定的なものであるとみなしていることが示された。また、女性は男性に比べて有意に相互独立的自己観($\alpha=.85$)が低く($t(339)=2.63, p<.01$)、相互協調的自己観($\alpha=.82$)が高いこと($t(339)=-2.75, p<.01$)が示された(表5)。

3.6. ストレス反応に与える各要因の影響

各要因がストレス反応に与える影響を調べるた

め尺度間相関を算出した。ストレスである生活の変化の各因子は、ストレス反応に弱い～中程度の正の相関をもっていた($rs=.24\sim.45, p<.01$)。他の尺度に関しては、 $p<.05$ で有意な相関を示したものもあるが、その数値は低く、関連性はほとんどないと考えてよい。

直線的ではない影響をとらえるために、ストレス反応の平均値(27.01)を基準として、 $\pm 1SD$ (8.92)で高群と低群に分けた。ストレス反応合計点が36点以上のストレス高群(62名)と18点以下のストレス低群(70名)との間で、各尺度の平均を比較した(表6)。ストレス高群に女性が多く(男性16名、女性45名、無回答1名)、ストレス低群に男性が多かった(男性41名、女性29名; $\chi^2(1)=13.87, p<.001$)。

生活の変化について、ストレス高群はストレス

表4 道徳判断の男女別平均とSD

	男性 (n=168)		女性 (n=173)			
	mean	SD	mean	SD		
非難中傷行動	4.24	0.94	4.26	0.85	$t(339)=-0.12$	$p=n.s.$
感染拡大行動	4.63	0.86	5.05	0.67	$t(314.8)=-4.96$	$p<.001$
社会的不平等	4.10	0.83	4.58	0.76	$t(334.3)=-5.62$	$p<.001$
自由制限	3.49	1.23	3.41	0.98	$t(318.7)=0.67$	$p=n.s.$
全項目合計	4.25	0.65	4.49	0.57	$t(331.4)=-3.64$	$p<.001$

表5 関係流動性、相互独立的自己観、相互協調的自己観の男女別平均とSD

	男性 (n=168)		女性 (n=173)			
	mean	SD	mean	SD		
関係流動性	3.71	0.67	3.53	0.69	2.54	$p<.05$
相互独立的自己観	4.51	0.96	4.23	1.03	2.63	$p<.01$
相互協調的自己観	4.83	0.98	5.11	0.90	-2.75	$p<.01$

表6 ストレス反応高群と低群の比較

	低群 (n=70)		高群 (n=62)			
	mean	SD	mean	SD		
生活習慣の変化	1.57	0.67	2.33	0.76	$t(128)=-6.08$	$p<.001$
一人時間の増加	1.70	0.85	2.68	0.91	$t(130)=-6.39$	$p<.001$
接触機会の減少	2.17	0.96	3.06	0.91	$t(127)=-5.40$	$p<.001$
非難中傷行動	4.21	0.99	4.44	0.94	$t(130)=-1.36$	$p=n.s.$
感染拡大行動	4.78	0.89	4.90	0.91	$t(130)=-0.79$	$p=n.s.$
社会的不平等	4.14	0.99	4.66	0.73	$t(130)=-3.43$	$p<.01$
自由制限	3.27	1.24	3.61	1.10	$t(130)=-1.66$	$p<.10$
関係流動性	3.85	0.74	3.50	0.75	$t(130)=2.70$	$p<.01$
相互独立的自己観	4.50	1.06	4.23	1.08	$t(130)=1.43$	$p=n.s.$
相互協調的自己観	4.77	1.11	5.16	0.87	$t(130)=-2.28$	$p<.05$

低群に比べて、生活習慣の変化 ($t(128)=-6.08, p<.001$)、一人時間の増加 ($t(130)=-6.39, p<.001$)、接触機会の減少 ($t(127)=-5.40, p<.001$) のすべてにおいて有意に辛いと感じていた。相関の結果と同様、ストレスラーとして生活の変化に辛さを感じる人がストレス反応の表出が多い結果となった。

道徳的判断は、ストレス高群はコロナ禍にともなう社会的不平等につながる行動を不道徳と感じる程度が有意に高く ($t(130)=-3.43, p<.01$)、自由制限を不道徳と感じる傾向がある ($t(130)=-1.66, p<.10$)。社会的な問題に強く反応する人がストレス反応を表出する程度が高いと思われる。

また、ストレス高群はストレス低群に比べて、有意に相互協調的自己観が高く ($t(130)=-2.28, p<.05$)、関係流動性が低い ($t(130)=2.70, p<.01$)。

3.7. 道徳判断のクラスター

行動の道徳意識を問う20項目に階層的クラスター分析を実施した (Ward法)。クラスターに所属する人数と解釈可能性を考慮し、4クラスターを採用した。道徳判断の4因子について、各クラスターの平均値を示したのが図2である。第1クラスターは非難中傷行動が特に高いことから、「非難敏感型」とした。31名がこのタイプに分類された。第2クラスターは感染拡大行動の得点が最も高いが、他の得点も高く、「全般型」と考えた。このタイプに

は175名が分類され、もっとも多いタイプであった。第3クラスターは、すべての因子で中間的な得点を示しているが、非難中傷行動の得点が低く、感染拡大行動の得点が高いことから「行動敏感型」、第4クラスターはすべての因子で得点が低いので、「寛容型」とした。「行動敏感型」は89名、「寛容型」は47名が分類された。

道徳判断のタイプごとに、生活環境の変化やストレス反応の違いを検討した。

一元配置分散分析の結果、ストレス反応に関しては、疲労感 ($F(3,338)=4.01, p<.01$)、身体不調感 ($F(3,338)=3.41, p<.05$)、ストレス合計 ($F(3,338)=3.47, p<.05$) に道徳観のタイプによる有意差が見られ、抑うつ感 ($F(3,338)=2.50, p<.10$) は有意傾向を示した。最小有意差による多重比較により、有意差がみられたものや有意傾向であったものに共通して、寛容型が他のタイプより低く、道徳に厳しくない人のストレス反応が低いことが示された (表7)。これに対して、高いストレス反応を示す傾向が強いのが、行動敏感型である。行動敏感型は感染拡大行動に対して不道徳と考える程度が高く、そのような人を非難中傷することに対してはあまり不道徳と考えない傾向を示すが、感染予防に協力しない人を不道徳と感じるあまり、ストレスを感じ、そのような人を非難中傷しても仕方ないと思うのかもしれない。

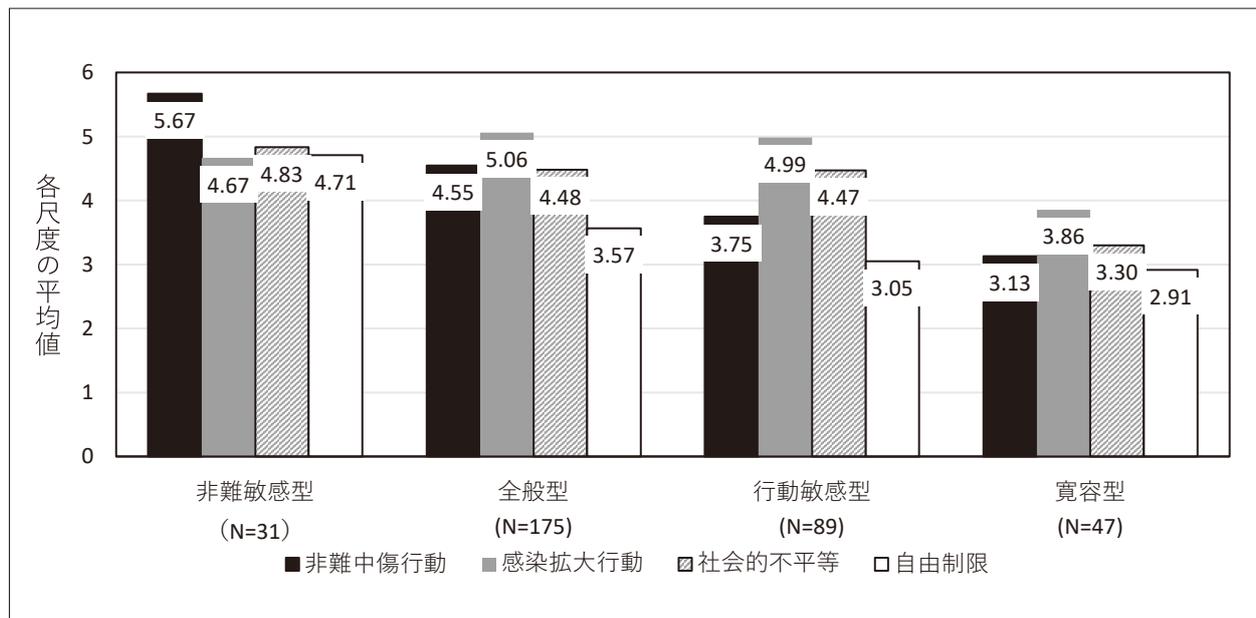


図2 道徳判断のクラスターの特徴

ストレッサーとしての生活環境の変化の負担感(辛さ)については、生活習慣の変化や一人時間の増加に関する負担感に、道徳判断のタイプによる違いはみられない。一方、接触機会の減少についての負担感 ($F(3,338)=2.89, p<.05$) は、寛容型に比べ、行動敏感型、全般型の負担感が高い。感染拡大行動に敏感になるタイプや、さまざまな行動に対して不道徳感を感じやすいタイプは、接触機会が減少することのポジティブな側面よりネガティブな側面をとらえやすいといえる。

また、相互独立的自己観 ($F(3, 338)=5.88, p<.01$)、相互協調的自己観 ($F(3, 338)=3.86, p<.05$) の2尺度は道徳観のタイプによる有意差がみられ、関係流動性 ($F(3, 338)=2.31, p<.10$) は、有意傾向がみられた。多重比較の結果、相互独立的自己観は、非難敏感型において他のタイプに比べて高く、相互協調的自己観は寛容型が他のタイプに比べて低いことが示された。

4. 考察

4.1. ストレッサーとなる変化

本研究に参加した大学生は、コロナ禍によって接触機会が減少したことについて、もっとも辛いと感じているようである。しかし、接触機会の減少に関する項目に「何ともなかった」と回答している人も20%程度、存在していることが示されている。本研究では、生活の変化をストレッサーとしてとらえたため、辛いことを示す選択肢は

「何ともなかった」だけであったが、人との接触が減少することにより、ポジティブな影響を受けている学生の存在も考えられる。授業のオンライン化については、大きな負担を感じた人とそうでない人に分かれた。文部科学省(2021)の調査で、半分以上の学生がオンライン授業に満足していることが示されていることと矛盾しない。

本研究で示されたストレッサーは、感染症拡大のフェイズとの関連も考慮しなければならないであろう。人との接触が減少したことも、オンライン授業についても、長期化することによってストレスが高まることも考えられるが、一方で生活の変化への慣れも形成される可能性がある。今後、感染症の推移にしたがって、ストレッサーの変化を見ていく必要があると思われる。

4.2. コロナ禍の道徳意識

本研究に参加した大学生は、行動の自由が制限されることはそれほど不道徳と感じないが、感染症予防に協力しないことは不道徳であると考えていた。同時に、新型コロナウイルス感染症に感染した人を非難することは不道徳と考えており、感染者への差別につながる意識は低いことが示された。10~70代までの7,520件を対象にした筑波大学の調査(Midorikawa et al., 2021)では、「感染した人は自業自得だ」のような、差別につながるような意見は多くの人が否定する一方で、5分の1から3分の1程度の人は「どちらともいえない」という認識

表7 道徳判断のスタイルによる比較

	非難敏感型 N=31		全般型 N=175		行動敏感型 N=89		寛容型 N=47		F(3,338)	多重比較 (p<.05)	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD			
抑うつ感	6.71	3.13	6.62	2.86	7.24	2.81	5.85	2.59	2.50	p<.10	行動>寛容
易怒感	5.94	2.59	5.17	2.40	5.65	2.45	5.28	2.53	1.37		
疲労感	7.29	3.33	7.11	2.80	7.99	2.72	6.30	2.59	4.01	p<.01	行動>全般、寛容
身体不調感	7.35	3.50	7.75	2.55	8.26	2.77	6.72	2.78	3.41	p<.05	行動、全般>寛容
ストレス合計	27.29	10.72	26.65	8.64	29.13	8.42	24.15	8.92	3.47	p<.05	行動>全般、寛容
生活習慣の変化	2.08	0.90	2.02	0.72	1.94	0.80	1.81	0.79	1.11		
一人時間の増加	2.29	1.02	2.21	0.86	2.28	0.89	2.02	0.92	0.96		
接触機会の減少	2.64	1.09	2.68	0.90	2.75	0.99	2.27	0.93	2.89	p<.05	行動、全般>寛容
関係流動性	3.81	0.74	3.65	0.64	3.58	0.70	3.43	0.75	2.31	p<.10	非難、全般>寛容
相互独立的自己観	5.07	1.22	4.28	0.87	4.30	1.07	4.38	1.03	5.88	p<.01	非難>行動、全般、寛容
相互協調的自己観	5.12	1.25	4.96	0.86	5.14	0.90	4.59	1.04	3.86	p<.05	非難、行動、全般>寛容

であった。また、「自粛するか」と「外出するか」ということについて、多くの人は葛藤状態にあることも示されていた。両調査ともに、多くの人は差別につながる意識を否定したり、不道德と考へたりしていることが示された。本研究の対象者は特に感染した人を非難することは道徳的に問題と考へていた。本研究が実施された時期は、筑波大学の調査の時期よりも累計の感染者数が多く、感染を他人事と感じなくなったことが関連しているのではないかと考へられる。また、本研究の参加者は、行動の自由が制限されることをさほど不道德と感じておらず、自粛の態度も身についてきたといえよう。コロナ禍では、インターネット上などで自粛警察やマスク警察などと呼ばれる現象が出現したが、道徳判断は時期による影響を受けると予想できる。

道徳判断の因子として、感染予防に協力しない行動を不道德と考へる因子と、感染者や感染予防に協力しない人に対して非難中傷することを不道德とする因子が出現したのは興味深い。また、道徳判断のクラスターでは、行動の道徳判断に厳しい人の中でも、非難中傷行動を特に不道德と考へるタイプと、感染拡大行動を特に不道德と考へるタイプがあることが示されている。感染拡大行動を特に不道德と考へるタイプはストレス反応が高い傾向にあり、逆にストレス反応が低いのは寛容型である。自分や周囲の人の行動についてあまり厳しく不道德と考へないことがストレスを軽減させることにつながることを示唆している。

4.3. ストレス反応の男女差

過去の感染症においても、男性に比べて女性において感染症の流行の影響が大きいことが示されており、新型コロナウイルスによるパンデミックでもWHOが女性への影響について警告している(Wenham, et. al., 2020)。ところが、本研究では生活の変化がストレスとなる程度に男女差がないことが示され、それにもかかわらず、ストレス反応は女性の方が高かった。大学の新生を対象として新型コロナウイルス感染症の流行前後のストレスや精神的健康を調査したFruehwirth, Biswas, & Perreira (2021)も、中程度～重症の不安症候群や抑うつ症候群は、女性はパンデミック前(2019年10～11月)

に比べてパンデミック中(2020年6～7月)に増加していることを示している。この調査においても、経済的な困難やオンライン授業のサポート不足、インターネット等へのアクセス不良などのストレスサーについては、男女差が認められなかった。コロナ禍の大学生を対象とした場合、ストレスサーとなるものには男女差がないものの、そのストレスサーにさらされたときのストレス反応の程度が男女で異なることは興味深い。感染症流行の女性への影響の大きさは、社会経済的な問題や家庭内暴力、妊娠出産などにまつわることが原因となっていると考えられているが、本調査でも、Fruehwirth, et. al. (2021)でも、ストレスサーとしてあげたものに家庭内暴力などは含まれておらず、女性のストレスサーを十分にカバーできていないことも一因と考えられる。

本研究における女子大学生のストレス反応の高さの一部は、さまざまな行動を道徳的に厳しく判断する傾向が高いことや、関係流動性の低さに現わされる人間関係を固定的に考へる傾向が強いこと、また自分を他者との関係の中で考へる相互協調的自己観が高いことと関連すると考へられる。

4.4. 関係流動性、相互独立的-相互協調的自己観の影響

関係流動性や相互独立的-相互協調的自己観とストレス反応には相関がほとんどなく直線的な関係は見出されなかった。しかし、ストレス反応の高群と低群とで比較すると差が認められ、コロナ禍におけるストレス反応に関係流動性や相互独立的-相互協調的自己観が関与することが示唆された。

関係流動性は社会的関係の選択の自由度を示しているが、社会レベルの関係流動性の高さは感染症拡大の速さと関連していることが示されている(Salvador, et. al., 2020)。関係流動性が低い日本社会の中で、ストレス低群が高群に比較して、個人が認識する関係流動性が高いことが示された。関係流動性を高く認識する人は、人と出会う機会を多く見積もることで感染へのリスクを高く評価し、それがストレスにつながるという関連も考へられたが、そうではないことがわかる。逆に現在の関係の中で接触の機会が低下しても、他の関係や将

来の関係に期待できるため、ストレスが低いことを示している。さらに、新しい出会いのためには、人に対して非難中傷したりする行動はマイナスとなると考えられ、また、新しい出会いの中で自分を選んでもらえるために道徳的な行動をする必要があるため、非難敏感型や全般型の関係流動性が高くなるのではないかと考えられる。

相互独立的-相互協調的自己観に関しては、歴史上、病原体の感染にさらされた地域ほど集団主義傾向が強いことが示唆されており (Fincher, et. al., 2008)、集団規範や集団内の関係を大切にする価値観が感染症の脅威にさらされた個人にとってバッファーとして機能していた可能性が指摘されている (石井, 2014)。実際、感染予防に有効とされるマスクの着用率は、人口密度や社会経済的要因、政府の政策の厳しさなどの要因をはるかに超えて、社会レベルの集団主義によって説明できることが示されている (Lu, Jin, & English, 2021)。感染症を社会の中でコントロールするためには、集団主義の社会が都合がよいと考えられる。一般的に、集団主義的と考えられている日本社会において、ストレス高群は低群に比較して相互協調的自己観が高いこと、さらに、相互協調的自己観は、道徳的に厳しい傾向があることが示された。

感染症の流行により、マスクの着用をはじめ、新しい行動規範が生まれるが、相互協調的自己観はそのような規範に敏感に反応する。自己を他者との関連で考える相互協調的自己観は、コロナ禍でみられるさまざまな行動に対して寛容になりやすく、道徳的判断が厳しくなり、それがストレスにつながる可能性があることが示唆される。相互協調的自己観の高さは規範を重視する集団主義的社会を形成し、社会の中で感染症の蔓延リスクを低減する役割を果たすが、個人としてはストレスを高める可能性がある。

一方、非難敏感型の道徳判断をする人の相互独立的自己観は高いことが示されている。自己と他者の間に明確な境界線を持つ相互独立的自己観をもつ個人の行動は、その人の態度や価値観など内的要因を原因とするため、各自の行動の自由を求めることにつながる。そのため感染拡大につながる行動を不道徳と考えるより、その行動を行った

人を非難中傷することに道徳的な問題を感じると考えられる。

道徳規範は感染症拡大のフェイズによる影響を受けると考えられるが、相互協調的自己観と道徳意識、ストレス反応の関係が感染症のフェイズによって変化するのか、今後の研究が必要である。

4.5. 本研究の限界と今後の課題

本研究ではコロナ禍における大学生が感じるストレスを調査し、女性のストレス反応が強いことを示した。また、ストレス反応に影響を与えているのは、ストレスラーとしての生活の変化、社会的不平等や自由制限を不道徳と考える道徳観、相互協調的自己観の高さ、関係流動性の低さであることが示された。

コロナ禍における生活の変化にはポジティブな側面もあるはずであるが、本研究では、ストレスラーとなりうる生活の変化を測定したため、ポジティブな側面についてはとらえられていない。さらに、ストレスラーとしての評価は調査参加者の約半数が1年生であったことも影響していると考えられる。

本研究は新型コロナウイルス感染症が日本に流行し、1回目の緊急事態宣言が発出されてから約1年~1年3ヵ月後に実施された。第4波と呼ばれる流行の始まる直前と第4波がおさまりに、第5波が始まる前の比較的感染状況が収まっている時期であった。そのような調査時期の状況が本研究の結果に影響を与えていることが考えられる。また、各行動の道徳判断やストレス反応についても感染症の拡大との関連が考えられることから、今後、感染症の推移にしたがって、調査を続け、感染拡大との関連を検討することが望まれる。

謝辞：本調査のご協力くださった日本大学国際関係学部および短期大学部学生の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

Fincher, C. L., Thornhill, R., Murray, D. R., & Schaller, M. (2008). Pathogen prevalence predicts human cross-cultural variability in individualism/collectivism.

- Proceedings of the Royal Society B*. 275, 1279-1285.
- Fruehwirth, J. C., Biswas, S., & Perreira, K. M. (2021). The Covid-19 pandemic and mental health of first-year college students: Examining the effect of Covid-19 stressors using longitudinal data. *PLoS ONE*, 16(3), Article e0247999. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0247999>
- 橋本 剛 (2021). コロナ禍初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討：社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて 人文論集, 71, 15-34.
- 石井 敬子 (2014). 文化神経科学 山岸俊男(編) フロンティア実験社会科学7 文化を実験する社会行動の文化・制度的基盤 (pp.35-62) 勁草出版
- 厚生労働省 (2020). 新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査結果概要について Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/syousai.pdf> (2021年11月8日)
- Luchetti, M., Lee, J. H., Aschwanden, D., Sesker, A., Strickhouser, J. E., Terracciano, A., & Sutin, A. R. (2020). The trajectory of loneliness in response to COVID-19. *American Psychologist*, 75(7), 897–908. <https://doi.org/10.1037/amp0000690>
- Lu, J. G., Jin, P., & English, A. S. (2021). Collectivism predicts mask use during COVID-19. *PNAS Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 118(23), Article e2021793118. <https://doi.org/10.1073/pnas.2021793118>
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98(2), 224–253.
- 松浦 紗織・勝岡 大貴・脇 龍平 (2012)：成人を対象とした心理的ストレス反応尺度の作成—信頼性と妥当性の検討—大阪経大論集, 63(3), 193-200.
- Midorikawa H, Aiba M, Lebowitz A, Taguchi T, Shiratori Y, Ogawa T, ... Tachikawa, H. (2021). Confirming validity of the fear of COVID-19 scale in Japanese with a nationwide large-scale sample. *PLoS ONE* 16(2): e0246840. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0246840>
- 文部科学省 (2021). 新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査 (令和3年5月25日) Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2021年11月8日)
- 尾関 友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂：トランスアクションな分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- Salvador, C. E., Berg, M. K., Yu, Q., San Martin, A., & Kitayama, S. (2020). Relational mobility predicts faster spread of COVID-19: A 39-country study. *Psychological Science*, 31(10), 1236-1244. <https://doi.org/10.1177/0956797620958118>
- Schug, J., Yuki, M., & Maddux, W. (2010). Relational mobility explains between-and within- culture differences in self-disclosure to close friends. *Psychological Science*, 21, 1471-1478.
- 高田 利武・大本 美千恵・清家 美紀 (1996). 相互独立の一相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要 (24), 157-173.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*. Westview Press.
- (トリアンディス, H.C. 神山 貴弥・藤原 武弘 (編訳) (2002). 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化— 北大路書房)
- Tull, M. T., Edmonds, K. A., Scamaldo, K. M., Richmond, J. R., Rose, J. P., & Gratz, K. L. (2020). Psychological outcomes associated with stay-at-home orders and the perceived impact of COVID-19 on daily life. *Psychiatry Research*, 289(2020) 113098. <https://doi.org/10.1016/j.psychres.2020.113098>
- Yuki, M, Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. *Center for Experimental Research in Social Sciences Working Paper Series Hokkaido University* No. 75.
- Wenham, C., Smith, J., Davies, S. E., Feng, H., Grépin,

K. A., Harman, S., Herten-Crabb, A., & Morgan, R. (2020). Women are most affected by pandemics—Lessons from past outbreaks. *Nature*, *583*(7815), 194–198. <https://doi.org/10.1038/d41586-020-02006-z>

全国大学生生活協同組合 (2021). 届けよう！コロナ禍の大学生生活アンケート 集計結果報告 Retrieved from https://www.univcoop.or.jp/covid19/pdf/covid_enq_2108_02.pdf (2021年11月 8 日)